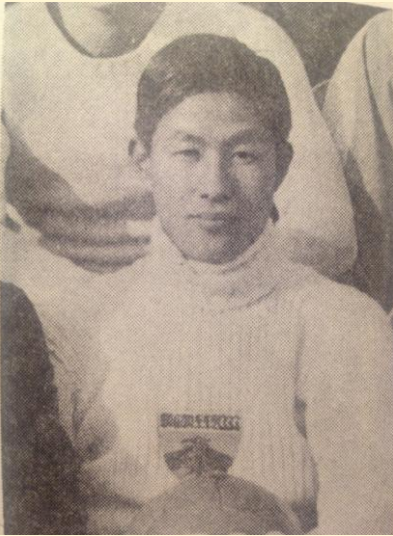


歴史館

～第二章 主将、浜田諭吉氏～

1927（昭和1）年頃



浜田諭吉氏

1921年に故深山静夫氏ら有志によって誕生した「慶應ブルー・サッカー倶楽部」。「慶應アソシエーション・フットボール（ア式蹴球）倶楽部」という名称を経て、1927（昭和2）年に「サッカー部」の名称で正式に慶應義塾体育会に加入した。

この名称は初代サッカー部主将を務めた故浜田諭吉氏（経済学部卒）による命名で、このスポーツの俗称である「SOCCER」から「サッカー」と命名。当時は一般的でなかった外来語の「サッカー」を採用したのは、「ア式蹴球部」とした場合、1899（明治32）年以来の伝統を誇る日本ラグビーの開祖「蹴球部」と紛らわしいと思われたためだった。なお、「SOCCER」は、現在はアメリカ英語風に「サッカー」と読み習わされているが、語頭の「SO」はどちらかといえばソに近い発音だというのが浜田君の解釈だった。戦後、「蹴」という文字が「当用漢字表」から外れたため、新聞で「蹴球」の代わりに「サッカー」が使われるようになったが、慶應義塾では今でも「サッカー部」と称している。ちなみに、早稲田大学では、現在も「ア式蹴球部」という名称を用いている。

「サッカー部」の名付け親であり、初代サッカー部主将である故浜田諭吉氏について、故松丸貞一氏はこう語る。

「彼の名は慶應サッカー部の輝かしい歴史や、美しい伝統を語るためには逸することの出来ない名前となるのである。

彼はオットー・ネルツ（ベルリン大学教授）の著書、「フスバル」の最初の翻訳者であり、サッカー部の戦術、技術、訓練の理論的基礎はほとんどネルツの書にまつといっても過言ではないからである。

彼の球歴はわずかに二年、慶應入学後というおそろしいほどの晩学。だから基礎技術（ボール・テクニク）は初歩で、お世辞にも上手いとはいえないし、器用な質でもなかった。それにシルコックの先がコッペパンのような大きくて堅い靴をはいて、しかも膝が堅いのでまことにぎごちない。後年、靴は改良されたが、

キックはさほど改善されなかった。球歴と素質のせいであろう。ただ誠実さと体力とは抜群であった。

ストイックな思索派。無口で滅多に笑ったり話したりしない。父君の死もわれわれは知らなかったほどである。だが口を切るときには、慎重でしかも情理を尽くしているので説得力があった。堅くなった会議の場でも、必要なときは異見を堂々と述べる勇気があった。また人の長所を発見し伸ばしてゆく聡明さをもっていた。だから、とっつきは悪いが、時とともに理解され、ついには部内外から畏敬された。希な人徳というべきであろう。

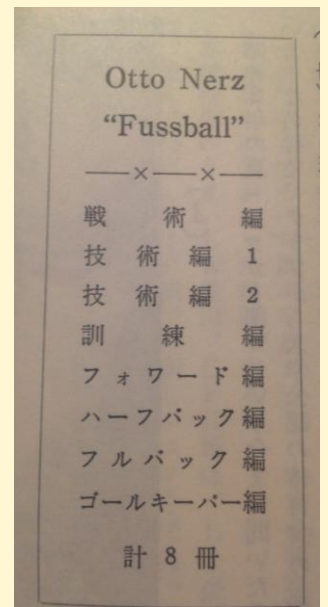
そんな彼だから主将就任の前後、自分の経験不足や技術の不安から、いくたびか反省逡巡したことであろう。彼は最上級生で本科2年、一年下の島田（晋）の外ほとんど二十歳前の予科生であって、相談相手もなく一層孤独に見えた。

経験なし、技術なし、コーチなし、主将は誠実さや責任感だけで果たして部をリードして行けるであろうか。また部は日本の最高水準にある関東大学一部の世帯を張って行けるであろうか。たれも口にはしないが、ひそかな心配であった。

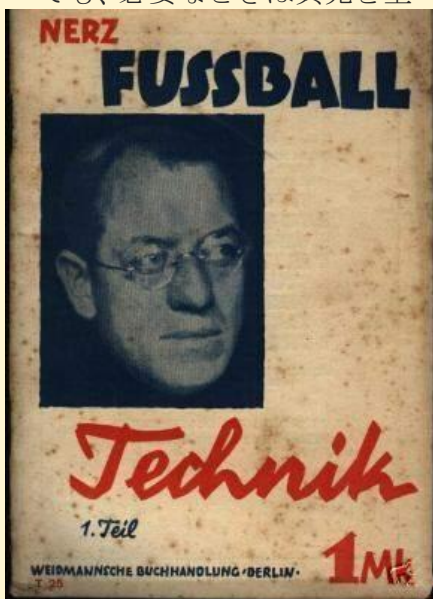
彼のチームは磁石も地図も持たず、広野を歩きだした小羊の群のような心細いものであった。

ちょうどこのころ小羊の前に天啓のようにネルツの叢書（8冊）が出現したのである。」

浜田氏は、Otto Nerz氏の著書“Fussball”に出会う。これについては次の歴史館で紹介したいと思う。



Fussball 目次



Fussball 表紙